

さいました。それがお別れになってしまいました。

尾崎先生ありがとうございました

小林 巳癸彦

平成15年5月14日、尾崎先生から学校に「糸魚川のツツジ園、月不見池のフジを觀賞後、笹倉温泉に入浴し今糸魚川駅にいる」「糸魚川に来たので声を聞きたくて」との電話があり、すぐ駅に車を走らせる。短い時間ではあったが、駅前の喫茶店で奥さんと3人で、コーヒーを飲みながら、黒姫山の思い出、佐渡や植物の話をし、糸魚川駅発18時39分の「北越」で送ったのが尾崎先生との最期の別れの日となった。

私が、尾崎先生と初めてお会いしたのは、大学3年の夏、すなわち、1967年8月4日～9日のじねんじょ会の長走川から蒜場山植物調査の時であった。参加者全員が長走川を渡渉した直後に大雨となり、川水はあつという間に増水した。尾崎先生が「川水が引くまでには時間がかかり当分は帰れない」と穏やかな笑みを浮かべて話されたのが印象に残っていた。それからはアブの大群に悩まされた。二日目まだ増水し水かさ下らない長走川から、高村晴元氏中心に、この調査のため、数回道つけをした新登山道での調査が開始された。WV育ちの私にとって植物調査の山行は、リズムがなく、天候は悪く、新しい登山道の歩行となりかなり体力を消耗しながら泊まり場「日の出清水（新称）」に到着した。清水に生息していたサンショウウオの幼体を飲むと目が良くなり元気がでるといふ池上先生の言葉で、度の強いメガネをかけていた笹岡先生が一気に飲み、笑いを誘い全員が疲れを癒す。忘れられない思い出になっている。

大学卒業後教職の道を歩いた私は、じねんじょ会はもちろん、生物分野の教科指導、や生物教育研究会でも尾崎先生から数々の御指導をいただいた。

「カエデの尾崎」「杵差岳の尾崎」「水性植物の尾崎」「瀧の尾崎」「巨樹・巨木の尾崎」「ハーモニカの尾崎」「アイデアの尾崎」など、常に新しい視点と発想で、いつも笑顔でお話をし、時にはテント場で、ハーモニカの音色で疲れを癒していただいた。先生の怒った顔は1度もみていない。

1975年夏じねんじょ会夏合宿は、尾崎先生の持ち山である杵差での東俣のカモス沢コースから杵差岳山頂までの調査であった。途中水がないコースのため、1人4リットルの水持ち上げが義務づけられ、重い荷がさらに重く感じての雨の中でのスタートとなる。雨は益々激しくなり、ブナの幹を流れ落ちる雨水でのを潤しながらの調査（登山）は、植物などは何のその、ひたすらトボトボと登る。途中の尾根でのテント場に着いた時は、ぬれたザックが重く体力消

耗し、「こんな重いカボチャなどもてるか」とカボチャを谷に投げ捨て、雨の降り続く中で笹の芽のみそ汁。「早く行きたや雲母温泉」が合い言葉の調査となったが、尾崎隊長の笑顔と調査に対する情熱で全員無事3日目に山頂小屋にたどり着く。思い出の飯豊山の一駒は鮮明に我が脳裏に焼き付いている。

また、福島瀧、佐瀧、鳥屋野瀧の調査のお手伝いをした。デンジソウ、オニバス、アサザ等貴重な植物との出会いも遠い昔の話になっている。

新潟県生物教育研究会の事務局は、新潟中央高校にあったが、尾崎先生が定年退職された昭和59年には新潟高校に移されており、微力ながらお手伝いすることになった。時代の流れの中で、創設時のメンバーも変り、生教研の活動内容も大きく変化していた。尾崎先生は、新潟支部の活動には良く参加していただき、難しい舵取りもいつも笑顔でまとめていただいた。

それから、何年たっただろうか？今、私が退職の年を迎えている。退職されても好奇心旺盛に活動された尾崎先生の姿をお手本に、私も第2の人生を歩き出そうとしています。

尾崎先生本当に長い間の御指導ありがとうございました、心安らかに眠りください。

その時、7歳と70歳

櫻井 幸枝

2000年4月29日、笹神村での第246回の調査会のなかでの出来事。もう調査会全体の記憶もあいまいになりつつあるが、「尾崎先生に関する事で何か文章を」という話が出たとき、思い出したのがこのときの出来事である。

この調査会に子供づれで参加した私は、写真など撮影しながら皆さんと歩いていた。ようやく訪れた春は日差しも明るく、写真の記録によるとホオノキの芽吹き、オオバクロモジ、ユキグニカンアオイ、ユキツバキ、サルトリイバラ、ユキグニミツバツツジの開花などを観察し、散策していたようである。もうすぐ権現山の山頂、というところで尾崎先生が道沿いのウラジロイタヤ（？アカイタヤだったか？）を手にとり、何事かお話してくださった。穏やかな口調を思い出すものの、どんなお話であったかは忘れてしまった、残念。

山頂には神社か祠があったか、ちょっとした広場のようで、どなたかが珍しいキノコを採集したとかで見せていただいた（キヌガサタケだったのだろうか？）。山頂で少し休憩し、その下り道のこと。花や実立ち止まったり、追いつき追い越して何人かの人と一緒にまた離れたりして歩いていた。ユキツバキの茂る道を歩きながら、西山先生

にツバキの葉の笛を教えていただいたりもした。

その前後、少し急な下り坂の途中、ゆっくりと下っていたら座って休まれている先生に私たちが追いついたのだろう、尾崎先生と一緒にになった。その際に子供に「いくつですか?」というように話しかけられて、子供が歳を答えると、先生はにこにこされながら感慨深げに「7歳と70歳と一緒に歩いている」とおっしゃった。道沿いにちょうど良く平らになった場所でご自分のカメラを私に渡され、「記念に写真を撮ってください」といったようなことをおっしゃられた。そのあと、権現山の木々の間の遠景をバックに、先生に私たち親子も撮影していただいたように記憶している。子供に、「できたら送りますよ」と言ってくださったものの、しかし、それっきりであった。にわかカメラマン(=私)が撮影した写真の出来がよほど悪かったのでなければ、きっと先生の写真のコレクションのどこかに、眠っているのだろう。私のカメラで撮影しておけばよかったと、少し後悔している。

手元には、この調査会終了間際、麓の神社で各自が散策・山菜取り、標本づくりなどをしていた時の写真が残っている。偶然にも、菅笠をかぶった尾崎先生が石垣に寄りかかっている姿が写っていた。大勢の楽しそうな様子に少しはなれたところからシャッターを切った記憶があるが、これでフィルムはちょうど最後だった。私の持っている写真に尾崎先生が写っていらっしゃるの、これ一枚きりということになる。

尾崎先生とお話したのは、記憶にある限り、どうもこれ一度きりのようである。何度か調査会ではご一緒させていただいたようにも思うが、写真も残っておらず、記憶もあいまいである。

少し時間が戻るが、1999年の強化合宿では、実習生として博物館実習に参加していた日程が重なったせいもあり、私はなまけて最終日の夜の勉強会だけに参加した。この時の調査地は杖差岳、下山してきた皆さん口々に大変だった、つらかった、と言っておられた。この後、もう暗くなりかけた時分だったと思うが、最後に下ってこられた尾崎先生をお迎えした記憶がある。朝は一番早く、4時に出発されたとかで、何時間歩き続けたのだろう、とか、お疲れの感じもあったがそれよりはにこやかなご様子にずいぶん驚いた記憶があるが、今にして思えばすでにその時70歳になるかならないかという年齢であったはずで、改めて驚かされた。

もう一つ、この文を書きながら、そういえば尾崎先生だったのだと頷く出来事を思い出したので、付け加えさせていただくことにする。

高校生のとき、所属していた生物クラブで2年続けて、科学博物館の標本展示会に植物標本を出品したことがある。標本には和名、採集地・年月日の他、「高校生だから学

名もつけて」という教官の指導のもと、なれないアルファベットの綴りを記入したラベルをつけることになり、出品前はしばらく図鑑とにらめっこの日々だった。

無事仕上がった標本にレポートをつけ、提出した。高校生の出品が少なかったこともあってか入賞し、努力賞か銀賞をいただいた。展示会を終え、戻ってきた標本についていた寸評用紙には、「学名は正しく…」というようなことがかかれていた。この寸評を見た指導教官は、「カエデの先生が審査員にいらしたのにカエデの学名を間違ってしまった。」とちょっと残念そうな表情をしていた。寸評用紙に記入した先生の名前などは書かれておらず、しかしこのときの審査員の顔ぶれと「カエデの先生」ということから、寸評を書いてくださったのは尾崎先生だったのだと思う。このころはまだ学名の意味も大切さも分からず、「こんなアルファベットの羅列をいちいち、つづりまで覚えているものなのか?」と変に感心した記憶がある(この間違いの原因は、使った図鑑の学名が古く、そのころ使われてきた学名とは違った、のだったか、図鑑の学名のつづりが誤っていたということだった気もする)。そして、今思うと恥ずかしいようだが、「こんなに一生懸命標本を作って出品したのに、学名の間違いのことしか書かれていないとは…。」と悔しいというか、少しいやな気分になったことを覚えている。

このときの標本・賞状などいまはいずこ、レポートには何を書いたのかというと、生物クラブの合宿で出かけた先で採集したブナ林の植物のことだったか、はっきりとは思いつけないのであるが、このときの生物担当の教官3人のうち2人がじねんじょの会員であったわけで、このときの植物採集が現在の私の原点とも言えるのかもしれない。

少しずつ覚えてきてはいるが、恥ずかしながら今でも学名には苦しめられている。フロアの調査などでリストをつくるとき、何度も確かめるのにつづり間違いや見間違いが無くならない。しかし、嫌になってもうこれでいいことにしようか、というとき、この尾崎先生の寸評に、励まされているというのか、叱られているような気がしている。

平成17年6月22日



↑
尾崎先生